

三重県尾鷲方言の外来語アクセント*

平田 秀

hiratashu1925@gmail.com

キーワード：日本語アクセント 外来語アクセント 音節とモーラ

要旨

本論では、三重県尾鷲方言の外来語アクセントについて述べる。尾鷲方言のアクセント体系は、3種の式（文節全体が担う声調的要素）の対立と下げ核の有無・位置の対立で記述される。外来語は、通方言的にみて無標のアクセントの出やすい語種である。調査項目とした外来語全677語中672語が筆者が「 α 式」とラベル付けした式をもち、尾鷲方言のアクセント体系における3種の式のうち、 α 式が無標の式であることが強く示唆される結果となった。下げ核の位置については、拍構造によって大部分が予測可能であることを示した。

1. はじめに

本論では、三重県尾鷲市尾鷲方言の外来語アクセントについて扱い、同方言における無標のアクセントについて考察する。

尾鷲市は、三重県南部に位置する人口約2万、面積約193km²の市である。三重県内で話される方言については、金田一春彦(1975 [1959])、上野善道(1987)などの諸先行研究がある。それらにより、三重県内のほぼ全域で京都市方言や大阪市方言と系統を同じくする中央式諸方言¹が話されていること、尾鷲市や熊野市など県南部の一部地域では中央式諸方言と系統を異にする方言が話されていることが早くから知られている。

本論における「尾鷲方言」とは、尾鷲市尾鷲地区出身・在住の1950年代生まれの女性話者によるものを指す。尾鷲地区とは、1954年の尾鷲市成立以前の北牟婁郡尾鷲町に該当する地区を指す。本論で扱う尾鷲方言のアクセント体系は、金田一(1975 [1959])において記述されている「尾鷲方言」と体系として概ね同一であると筆者は判断している²。

筆者は、2010年以降尾鷲市内で現地調査を行い、その結果、先行研究で2つの式（‘式’につい

* 本論は、科学研究費補助金・特別研究員奨励費「三重県尾鷲市方言のアクセント研究」（課題番号：26・9547、研究代表者：平田秀）の助成を受けた現地調査に基づくものである。

¹ 中央式諸方言とは、上野(1987:16)で定義されている「類別語彙の2拍名詞において第2類と第3類が合流し、第1類/第2類・第3類/第4類/第5類の4つの対立をもつ方言」を指す。前出の「類別語彙」とは、過去の文献、ならびに現代諸方言の考察から、古い日本語において同じアクセントをもっていたと推定される語彙を一類ずつまとめたものであり（『国語学大辞典』:7）、金田一(1974)において詳述されている。

² 金田一(1975 [1959])においては「糸」+「は」が「イター」となるように、助詞が先行する名詞と融合する音形が存在すると記述されているが、現時点までの調査では筆者はそのような現象を確認していない。

ては第2節で詳述)をもつとされる同方言に、2式による解釈のできない現象がみられた(平田秀 2013)。

第2節で尾鷲方言のアクセント体系を概観し、続く第3節で外来語アクセントについて述べる。その上で、第4節で外来語アクセントの決定の規則について扱い、同方言における無標のアクセントについて考察する。

2. 尾鷲方言のアクセント体系

尾鷲方言のアクセント体系は、以下の(1)(2)に示す特徴をもつ。

(1) 下げ核をもつ。

下げ核：レキシコンにその有無と、有核の場合何拍目に置かれるかの情報が入っているもので、次の拍³を下げる働きを持つ(上野 1992: 11)。下げ核の担い手は拍である。

(2) α式・β式・γ式の3つの式をもつ。

式：レキシコンに入っている情報で、すべての自立語はα式・β式・γ式のいずれかの式をもつ。式の担い手は文節全体である。(1)で述べた音調の下がり目を規定する下げ核とは別に、文節全体の音調の方向を定める働きを持つ(上野 1987: 60)。

(2)で示した3式のふるまいは、(3)～(5)の通りである。

(3) α式(上昇式)：

- ・文節は低く始まる。
- ・下げ核のあるときは、下げ核を担う拍の左で上昇し、その後下げ核の働きによって下降が起こる。
- ・下げ核のないときは文節の末尾拍の左で上昇する。
- ・1拍目が下げ核を担う場合、文節は高く始まる。

(4) β式(2拍卓立上昇式)：

- ・下げ核のあるときは、下げ核を担う拍に先行する拍の左で上昇し、その後下げ核の働きによって下降が起こる。
- ・2拍目が下げ核を担う場合、文節は高く始まる。

(5) γ式(平進式)：

- ・単独形では高く始まる。
- ・複雑な連読変調の現象がみられる。

³ 拍とは上野(2006: 2)で述べられているアクセントの長さを構成する単位を指し、尾鷲方言ではモーラに一致する。

(4) で述べたβ式は、尾鷲方言について述べた諸先行研究に記述がない式であり、筆者が2010年以降現地調査を行った結果、体系内に設定の必要があると判断した式である。

尾鷲方言における4拍名詞の語例を(6)に示す。(6)中の「n型」は、「n拍目が下げ核を担う型」を表し、「0型」は、下げ核のない無核型を表す。

(6) 尾鷲方言の4拍語の例⁴

語	型	-は	この-
a. 友達	α0型	トモダチ[ワ]	コノトモダ[チ]
b. カプセル	α1型	[カ]プセルワ	コノ[カ]プセル
c. 絵葉書	α2型	エ[ハ]ガキワ	コノエ[ハ]ガキ
d. かみそり	α3型	カミ[ソ]リワ	コノカミ[ソ]リ
e. 目印	β2型	[メジ]ルシワ	コノ[メジ]ルシ
f. いちじく	β3型	イ[チジ]クワ	コノイ[チジ]ク
g. くろんぼ	γ2型	[クロ]ンボワ	コ[ノクロ]ンボ ~ コ[ノ]クロンボ
h. 紫	γ3型	[ムラサ]キワ	コ[ノムラサ]キ ~ コ[ノ]ムラサキ

(3)(4) で述べた通り、1拍目が下げ核を担うα式の文節と、2拍目が下げ核を担うβ式の文節は高く始まる。単独形で高始まりとなるγ式の区別が問題となるが、α式・β式とγ式では、「この-」が先行した際のふるまいが異なる。

(7) 尾鷲方言の4拍名詞 (抜粋)

語	型	-は	この-
b. カプセル	α1型	[カ]プセルワ	コノ[カ]プセル
e. 目印	β2型	[メジ]ルシワ	コノ[メジ]ルシ
g. くろんぼ	γ2型	[クロ]ンボワ	コ[ノ]クロンボ ~ コ[ノ]クロンボ
h. 紫	γ3型	[ムラサ]キワ	コ[ノ]ムラサキ ~ コ[ノ]ムラサキ

「この-」にγ式の文節が後続した場合、コ[ノ]と「この-」の2拍目の左で上昇が起こる。それに対し、「この-」にα式・β式の文節が後続した場合には、「この-」内部での上昇が起こら

⁴ (6)(7)中に差別等の意図をもって用いられる語が含まれるが、当該語彙の使用にあたり、そのような意図のないことを記す。

ない。この現象について、筆者は式の関わる連読変調の一種と解釈しており、単独形で高始まりとなる文節がどの式をもつかは、この連読変調のふるまいの違いで判別することができる。

また、「この-」に後続する γ 式の文節は、 γ 式の文節内部で下げ核による下降が起こらない場合、「この-」に低く続くという現象がみられる。

(8) γ 式の連読変調

拍数	型				
1拍	$\gamma 0$ 型	[手ー]	[手ーワ]	コ[ノ]手ー	コ[ノ]手ーワ
2拍	$\gamma 0$ 型	[アメ]	[アメワ]	コ[ノ]アメ	コ[ノ]アメワ
3拍	$\gamma 2$ 型	[モメ]ン	[モメ]ンワ	コ[ノ]モメ]ン ~ コ[ノ]モメ]ン	コ[ノ]モメ]ンワ ~ コ[ノ]モメ]ンワ
3拍	$\gamma 3$ 型	[クジラ]	[クジラ]ワ	コ[ノ]クジラ	コ[ノ]クジラ]ワ ~ コ[ノ]クジラ]ワ

(8) で、コ[ノ]アメ、コ[ノ]アメワ、コ[ノ]クジラ のように、単独形では高く始まる γ 式の文節が、「この-」に低く続く場合がみられる。この現象が生じる条件は、(9) の通りである。

(9) γ 式の文節が「この-」に低く続く条件

- ・ γ 式の文節において下げ核による下降が生じない場合、 γ 式の文節は「この-」に低く続く。
- ー γ 式・下げ核なしの文節 (コ[ノ]手ー、コ[ノ]手ーワ、コ[ノ]アメ、コ[ノ]アメワ)
- 3拍・ γ 式・3拍目に下げ核の語のみからなる文節 (コ[ノ]クジラ)

(9) に該当しない γ 式の文節は、コ[ノ]モメ]ン のようにコ[ノ から高く続く場合と、コ[ノ]モメ]ン のように下降が2回起こる場合が観察された。同一の話者の間でも、発話により2回の下降が生じるケースと生じないケースがあるようである。筆者は、「コ[ノ の2拍目の左での上昇」「下げ核による下降」の両者が実現すれば、許容される音形になると観察している。

本節では、尾鷲方言のアクセント体系について概観した。次節で、尾鷲方言の外来語アクセントについて述べる。

3. 尾鷲方言の外来語アクセント

本節では、尾鷲方言の外来語アクセントについて詳述する。外来語は、通方言的に無標のアクセントの出やすい語種であり、尾鷲方言においても無標のアクセントを考察する上で外来語が重要な役割を果たすと考えられる。

尾鷲方言の外来語アクセントは、式が α 式1種にほぼ決定される。このため、尾鷲方言における無標の式は α 式であることが示唆される。有核か無核か、有核の場合下げ核をどの拍が担う

かは拍構造によって大部分が予測できる。

本節で扱う外来語は、共時的に明確な形態素境界を含まない2拍から6拍からなるものとする。「フランスパン」や「ガードレール」のように内部に形態素境界を含むものは複合名詞アクセント規則の適用を受けると考えられ、外来語アクセント規則をとらえる上での障害となるため、本章では扱わない。また、形態素境界を含まない語例が少なくなる7拍語以上を除外した。

外来語の語例は、中井幸比古 (2002: 64-211)、松浦年男 (2014: 171-187) に掲載の外来語を中心に、話者からの回答が得やすいと筆者の判断した全677項目について調査を実施した。

3.1節でまず外来語アクセント全体について概観したのち、3.2節で拍数別に詳述する。

3.1. 外来語アクセント概観

表1に、逆算指定による型と所属語彙数を掲載する。マイナス記号と丸囲み数字①を用いた型の名称は、「語末から数えてn拍目が下げ核を担う型」を表す。①は無核型を表す。アクセント体系に想定しえない型については、表中に「--」で示した。

表1 外来語の逆算指定によるアクセント型と所属語彙数

	α ①	α -②	α -③	α -④	α -⑤	α -⑥	β -②	β -③	γ -①	計
2拍	0	41	--	--	--	--	--	--	0	41
3拍	7	12	91	--	--	--	0	--	1	111
4拍	64	1	51	96	--	--	0	1	0	213
5拍	18	5	88	45	64	--	0	2	0	222
6拍	6	1	41	20	14	7	1	0	0	90
計	95	60	271	161	78	7	1	3	1	677

表1に示した通り、全677例中672例が α 式で現れ、 β 式で出たものは4例、 γ 式で出たものは1例にとどまった。下げ核の有無・位置については、外来語の拍数により傾向が異なる。

3.2節で、外来語の拍数別に語例を示す。

3.2. 拍数別にみた外来語アクセント

本節で、2拍から6拍の拍数別に外来語アクセントについて詳述する。

3.2.1. 2拍外来語

2拍外来語のアクセントは、(10)に示す通りである。本節以降、「軽」で軽音節、「重」で重音節、「超」で「超重音節」を表す。

(10) 2拍外来語は $\alpha 1$ 型で出る。

(11) 2拍外来語の例：

型	音節構造	語例	語数
α1型 (全41例)	軽軽	[ガ]ス、[チェ]ス、[ド]ア、[ビ]ル、[ペ]ア	32例
	重	[パ]イ、[バ]ー、[パ]ン	9例

(11) に示した通り、2拍目が通常のモーラであっても特殊モーラであっても、すべての語例がα1型 (=α-②型) で出た。

3.2.2. 3拍外来語

3拍外来語のアクセントは、(12) に示す通りである。

(12) 3拍外来語はα1型で出るのが基本である。

(13) 3拍外来語の例：

型	音節構造	語例	語数
α1型 (全91例)	軽軽軽	[カ]メラ、[ゴ]リラ、[テ]レビ	21例
	重軽	[ア]イス、[コ]ーラ、[レ]ンズ	52例
	軽重	[カ]バー、[ギ]ター、[プ]リン、[レ]モン	16例
	超	[コ]イン、[ワ]イン	2例
α2型 (全12例)	軽軽軽	ベ[ニ]ヤ、ラ[ジ]オ	2例
	軽重	ス[パ]イ、ド[ラ]イ、シ[チュ]ー、ス[キ]ー、ミ[シ]ン	10例
α0型 (全7例)	軽軽軽	アル[ミ]、ベル[ト]、ラム[ネ]	3例
	重軽	キャッ[プ]、コッ[プ]、チョッ[キ]	3例
	軽重	カレ[ー]	1例
γ3型 (全1例)	重軽	[マツ]チ	1例

本論で扱う外来語全677語中唯一のγ式をもつ例は3拍の[マツチ] である。また、重軽の音節構造をもつ語、2拍目が特殊モーラである語の中で2拍目が下げ核を担うα2型の例は得られておらず、外来語においては特殊モーラが下げ核を担わない傾向がみられた。この特殊モーラの特徴は、他の拍数の語にも共通するものである。

3.2.3. 4拍外来語

4拍外来語のアクセントは、(14) に示す通りである。

(14) 4拍外来語はα1型、α0型、α2型を中心に出る。

(15) 4拍外来語の例：

型	音節構造	語例	語数
α1型 (全96例)	軽軽軽軽	[ア]クセル、[ピ]リオド、[マ]ナスル	12例
	重軽軽	[ア]ップル、[オ]ーボエ、[キャ]ンパス	20例
	軽重軽	[メ]リット	1例
	軽軽重	[ア]クション、[カ]ロリー、[ネ]クタイ	21例
	重重	[イ]ンター、[エ]ッセー、[エ]ンジン	42例
α0型 (全64例)	軽軽軽軽	アトリ[エ、エジプ[ト、ピスト[ル	45例
	重軽軽	アンテ[ナ、オーロ[ラ、ナイロ[ビ	14例
	軽重軽	スポン[ジ、プレー[ト	2例
	軽軽重	ベテラ[ン	1例
	重重	アイロ[ン、ペンギ[ン	2例
α2型 (全51例)	軽軽軽軽	セ[レ]クト、プ[リ]ズム、ラ[ジ]ウム	3例
	軽重軽	ア[パ]ート、オ[レ]ンジ、カ[セ]ット	39例
	軽軽重	ガ[ソ]リン、ス[ト]ロー、ビ[タ]ミン	8例
	超軽	ス[イ]ッチ	1例
α3型 (全1例)	重重	コー[ヒ]ー	1例
β2型 (全1例)	軽軽軽軽	[キャラ]メル	1例

4拍外来語においては、α1型、α0型、α2型の順で語例が多いという結果となった。2拍外来語では出現せず、3拍外来語では全111例中7例しか出現しなかったα0型が多く出ることが4拍外来語アクセントの特徴であると言える。第4節で、拍構造によって外来語のアクセント型が予測可能であることを述べる。

3.2.4. 5拍外来語

5拍外来語のアクセントは、(16) に示す通りである。

(16) 5拍外来語はα3型、α1型、α2型を中心に出る。

(17) 5拍外来語の例：

型	音節構造	語例	語数
α3型 (全88例)	軽軽軽軽軽	アス[ファ]ルト、カル[シ]ウム、クリ[ス]マス	20例
	重軽軽軽	アッ[プ]リケ、エン[ジ]ニア、タイ[ピ]スト、ヨー[グ]ルト	9例
	軽軽重軽	アル[バ]イト、オル[ゴ]ール、クリ[ニ]ック、タブ[ロ]イド	21例
	軽軽軽重	アス[ピ]リン、エス[キ]モー、スパ[ゲ]ティー	16例

	重重軽	アー[モ]ンド、アン[コ]ール、チュー[リ]ップ	12例
	重軽重	コン[ディ]ション、バー[ベ]キュー、パイ[オ]リン	10例
α1型 (全64例)	輕輕輕輕	[ファ]クシミリ、[フェ]スティバル	2例
	重輕輕軽	[イ]ンパクト、[ダ]イジェスト、[ホ]ッチキス	15例
	輕輕重軽	[シ]ルエット、[テ]クニック、[ボ]クシング	6例
	輕輕軽重	[セ]レモニー、[パ]タフライ、[レ]ストラン	7例
	重重軽	[ア]ンケート、[パ]ッケージ、[ペ]ンダント	9例
	重軽重	[ア]イボリー、[タ]ンバリン、[プ]ーメラン	25例
	α2型 (全45例)	輕輕輕輕	オ[リ]ジナル、コ[ロ]シウム、パ[レ]スチナ
軽重輕輕		コ[マ]ーシャル	1例
輕輕重軽		ク[レ]ジット	1例
輕輕軽重		ア[レ]ルギー、キ[リ]シタン、リ[ア]クション	29例
重軽重		オ[イ]スター	1例
軽重重		カ[レ]ンダー、ク[ラ]ッカー、ス[テ]ーション	8例
α0型 (全18例)	輕輕輕輕	アルバニ[ア、オセアニ[ア、バクテリ[ア	8例
	重輕輕軽	アンモニ[ア、ハーモニ[カ	2例
	輕輕重軽	アルコール	1例
	輕輕軽重	グルタミ[ン	1例
	重重軽	パーキン[グ、ピッチン[グ、ランキン[グ	4例
	軽重重	ブランデ[ー、プレーカ[ー	2例
α4型 (全5例)	輕輕軽重	サウス[ポ]ー、ディスプ[レ]ー、ヒステ[リ]ー	3例
	重軽重	ウイス[キ]ー、カンガ[ル]ー	2例
β3型 (全2例)	輕輕軽重	ア[カデ]ミー	1例
	輕輕重軽	プ[レゼ]ント	1例

5拍外来語はα3型、α1型、α2型を中心に出る。この3種のアクセント型について、拍構造から予測がつけられることを第4節で述べる。また、/ia/・/ingu/・/in/など、語末に特定の音をもつものがα0型でまとまってみられた。この無核化の現象についても、第4節で述べる。

3.2.5.6拍外来語

6拍外来語のアクセントは、(18) に示す通りである。

(18) 6拍外来語はα4型、α3型、α2型を中心に出る。

(19) 6拍外来語の例：

型	音節構造	語例	語数
α4型	輕輕輕輕輕輕	クロロ[ホ]ルム、シエラ[レ]オネ、マクド[ナ]ルド	4例

(全41例)	重軽軽軽軽	サンタ[マ]リア、パンタ[グ]ラフ、ボーカ[リ]スト	4例
	軽重軽軽軽	スタイ[リ]スト、トラン[ジ]スタ	2例
	軽軽軽重軽	エキス[パ]ート、オキシ[ダ]ント、プラス[チ]ック	8例
	軽軽軽軽重	アドレ[ナ]リン、ヘモグ[ロ]ビン	2例
	重軽重軽	アンモ[ナ]イト、コック[ピ]ット、コント[ロ]ール	11例
	軽重重軽	オリン[ピ]ック、クリー[ニ]ング、トラン[ペ]ット	9例
	軽重軽重	アコー[ディ]オン	1例
α3型 (全20例)	軽軽軽軽軽	マダ[ガ]スカル	1例
	重軽軽軽軽	オー[ケ]ストラ	1例
	軽軽重軽軽	スク[ラ]ンブル、スチュ[ワ]ーデス	2例
	軽軽軽軽重	ヘリ[コ]プター	1例
	重重軽軽	アン[サ]ンプル、イン[タ]ーバル、パイ[ナ]ップル	3例
	重軽軽重	アン[ソ]ロジー、シン[メ]トリー	2例
	軽軽重重	クロ[ワ]ッサン、バド[ミ]ントン、ブル[ド]ーザー	7例
α2型 (全14例)	重重重	カー[ネ]ーション、チン[パ]ンジー、ハン[バ]ーガー	3例
	軽重軽軽軽	ウ[エ]ートレス、リ[バ]ーシブル	2例
	軽軽軽重軽	レ[ジ]スタンス	1例
	軽軽軽軽重	ボ[キャ]ブラリー	1例
	軽重重軽	ス[ト]ッキング、ト[レ]ーニング、パ[フォ]ーマンス	4例
	軽重軽重	ト[ラン]ポリン、プ[ラ]イバシー、プ[ロ]ッコリー	6例
	α1型 (全7例)	軽軽軽軽重	[ア]クセサリー
重軽重軽		[サ]イクリング、[ト]ーナメント、[パ]ンフレット	5例
重軽軽重		[ラ]イブラリー	1例
α0型 (全6例)	軽軽軽軽軽	カリフォルニ[ア]	1例
	重軽重軽	オープニン[グ]	1例
	軽重重軽	スパーリン[グ]、ブラッシン[グ]、レコーディン[グ]	4例
α5型 (全1例)	軽軽軽軽軽	ブルキナ[ファ]ソ	1例
β5型 (全1例)	軽軽軽軽軽	グラジ[オラ]ス	1例

4拍語・5拍語と同様に、拍構造によってアクセント型の予測が可能であること、/ia/・/ingu/ という特定の音で終わる音がα0型で出ること、第4節で述べる。

次の第4節で、尾鷲方言の外来語アクセントに見られる規則性について述べる。

4. 尾鷲方言の外来語アクセント規則

本節では、尾鷲方言において外来語のアクセント型と音節構造に連関がみられることを述べる。

尾鷲方言の外来語アクセント規則の概要は、(20) ~ (24) に示す通りである。

(20) 外来語の式は、 α 式で出る。

(21) 2拍外来語・3拍外来語は $\alpha 1$ 型で出る。

(22) 4拍から6拍の外来語について、語末から数えて2音節目が重音節ならば、その音節の自立拍が下げ核を担う。語末から数えて2音節目が軽音節ならば、その左の音節の自立拍が下げ核を担う⁵（≒古典ラテン語アクセント規則・Kubozono 1996: 76-77）。

(23) 以下の $a \sim c$ を満たす拍構造をもつ場合、 $\alpha 0$ 型で出る（拍構造による無核化・松浦 2014⁶: 54）。

a. 4モーラである。

b. 語末が軽音節の連続である。

c. 語末母音が/w以外である。

(24) 以下に示す音の配列で終わる5モーラ語以上の場合、 $\alpha 0$ 型で出る（形態素による無核化・窪菌晴夫 2006: 67、儀利古幹雄 2010: 9, 2011: 78）。

/-ia/: アンモニ[ア、ブルガリ[ア、カリフォルニ[ア

/-ingu/: ピッチング、ランキング、オープンング

/-in/: グルタミ[ン

(22) ~ (24) については、いずれも諸先行研究で東京方言のアクセント規則として扱われているものであるが、尾鷲方言においても、下げ核の位置の決定においては同様の規則が働いているととらえられる。(25) に、尾鷲方言の4拍から6拍の外来語について、(22) の規則が予測する型と、その型で出た語例を示す。「(-) 軽重軽」は「軽重軽の音節構造で終わる外来語」を表し、4拍の軽重軽の構造をもつもの、5拍の軽軽重軽の構造をもつもの、6拍の軽軽軽重軽および重軽重軽の構造をもつもの、以上4種の拍構造を束ねる用法で用いる。(25) は4拍から6拍まで

⁵ 本節において、音節構造（軽音節・重音節）とアクセント型の連関をみるため、超重音節を含むととらえられる語例1例（4拍語・ス[イ]ッチ）を除外した。

⁶ この規則は、松浦（2014: 54）において、Kubozono（2006: 1159）における外来語の無核化規則が改められたものである。

a. 4モーラである。

b. 語末が軽音節の連続である。

c. 語末母音が挿入母音でない。

松浦（2014: 53-54）では東京方言について、語末が挿入母音であるエ[ジプト やオ[カルト が無核型で出ること、語末が挿入母音ではない[ティ]ラミス (tiramisu) やマ[ナ]スル~[マ]ナスル (Manaslu) が有核型で出、無核型で出ないことなどから、cの条件を「語末母音が/w以外である」に改めた規則が提示されている。尾鷲方言においても、エジブ[ト やオカル[ト については無核型が得られ、[ティ]ラミス や[マ]ナスル は有核型が得られたため、本論においては松浦（2014: 54）の規則を採用した。

の外来語を対象とするため、重重重は6拍の重重重の構造をもつもののみとなり、-軽軽軽は4拍軽軽軽軽、5拍軽軽軽軽軽および重軽軽軽、6拍軽軽軽軽軽軽、軽重軽軽軽、重軽軽軽軽の6種を束ね、必ず-軽軽軽に先行する音節が存在する形となる。

(25) 音節構造とアクセント型

音節構造と (22) の予測する型		語例			
語末から2音節目が重	(-)軽重軽	α -③型	オル[ゴ]ール	軽軽重軽	5拍 α 3型
	(-)重重軽	α -③型	アン[コ]ール	重重軽	5拍 α 3型
	(-)軽重重	α -④型	ス[ト]ーリー	軽重重	5拍 α 2型
	重重重	α -④型	ハン[バ]ーガー	重重重	6拍 α 3型
語末から2音節目が軽	-軽軽軽	α -③型	アス[ベ]スト	軽軽軽軽軽	5拍 α 3型
	(-)重軽軽	α -④型	コ[マ]ーシャル	軽重軽軽	5拍 α 2型
	(-)軽軽重	α -④型	エ[ネ]ルギー	軽軽軽重	5拍 α 2型
	(-)重軽重	α -⑤型	[コ]ースター	重軽重	5拍 α 1型

(26) に、(22) ～ (24) の規則によってアクセント型を予測できた語数と、(22) ～ (24) の予測する型にあてはまらない型で出た語数を示す。

(26) 規則 (22) ～ (24) の予測する型で出た割合

	(22)	(23)	(24)	(22) ～ (24) の合計	(22) ～ (24) 以外	合計
a. (-) 軽重軽	79	0	1	80 (81.6%)	18 (18.4%)	98
b. (-) 重重軽	21	0	8	29 (69.0%)	13 (31.0%)	42
c. (-) 軽重重	15	0	0	15 (88.2%)	2 (11.8%)	17
d. 重重重	3	0	0	3 (100.0%)	0 (0.0%)	3
e. -軽軽軽	42	38	10	90 (64.7%)	49 (35.3%)	139
f. (-) 重軽軽	26	12	0	38 (95.0%)	2 (5.0%)	40
g. (-) 軽軽重	53	0	1	54 (56.8%)	41 (43.2%)	95
h. (-) 重軽重	31	0	0	31 (68.9%)	14 (31.1%)	45
i. 4拍重重	42	0	0	42 (93.3%)	3 (6.7%)	45
合計	312	50	20	382 (72.9%)	142 (27.1%)	524

(26a) (-) 軽重軽の例

(22) で予測: ア[パ]ート、タブ[ロ]イド、カスタ[ネ]ット

(24) で予測: オープニン[グ]

(22) ～ (24) で予測できない例: スポン[ジ]、[シ]ルエット、プ[レ]ゼント

(26b)(-) 重重軽の例

(22) で予測: アン[コ]ール、クリー[ニ]ング、トラン[ペ]ット

(24) で予測: ランキン[グ、スケーティン[グ、レコーディン[グ

(22) ~ (24) で予測できない例: [ア]ンケート、[メ]ッセージ、ス[ト]ッキング

(26c)(-) 軽重重の例

(22) で予測: カ[レ]ンダー、アド[バ]イザー、クロ[ワ]ッサン

(22) ~ (24) で予測できない例: ブランデ[ー、プレーカ[ー

(26d) 重重重の例

(22) で予測: カー[ネ]ーション、チン[パ]ンジー、ハン[バ]ーガー

(26e)-軽輕輕の例

(22) で予測: プ[リ]ズム、イス[ラ]エル、スタイ[リ]スト

(23) で予測: アトリ[エ、カシミ[ア、ステレ[オ

(24) で予測: アルジェリ[ア、バクテリ[ア、カリフォルニ[ア

(22) ~ (24) で予測できない例: [ア]クセル、ホノル[ル、[コ]ンテスト

(26f)(-) 重輕輕の例

(22) で予測: [コ]ンパス、コ[マ]ーシャル、パイ[ナ]ップル

(23) で予測: アンテ[ナ、オーロ[ラ、ナイロ[ビ

(22) ~ (24) で予測できない例: テーブ[ル、メート[ル

(26g)(-) 軽軽重の例

(22) で予測: [カ]ロリー、ア[レ]ルギー、コ[メ]ディアン

(24) で予測: グルタミ[ン

(22) ~ (24) で予測できない例: ベテラ[ン、ディスプ[レ]ー、カメ[レ]オン

(26h)(-) 重軽重の例

(22) で予測: [ア]イボリー、[タ]ンバリン、ブ[ロ]ッコリー

(22) ~ (24) で予測できない例: カンガ[ル]ー、バー[ベ]キュー、オ[イ]スター

(26i) 4拍重重の例

(22) で予測: [エ]ンジン、[ク]ッキー、[ナ]イロン

(22) ~ (24) で予測できない例: アイロ[ン、コー[ヒ]ー、ペンギ[ン

(22) ~ (24) で予測できない割合が20%を超えた(26b)(-) 重重軽、(26e)-軽輕輕、(26g)(-) 軽軽重、(26h)(-) 重軽重の音節構造をもつものについては、諸先行研究で行われた分析と同様の解釈を行うことで、例外となる語例が減少することを以下に述べる。

(26b)(-) 重重軽の音節構造をもつ語の例外については、(27) の規則を追加することで、例外となる語例が減少する。

(27)(26b)(-) 重重軽の構造をもつ語の例外について

(22) ~ (24) で予測できない13例は、すべて α -⑤型で出たものである。

(-) 重重軽の構造をもつもののうち、

a. 語末軽音節に挿入母音を含むものである。

b. 語末から数えて2番目の音節に撥音・促音を含むものである。

以上a・bの条件を満たす場合、語末から数えて3番目の音節の自立拍が下げ核を担いやすい(田中真一 2008: 111)。

田中 (2008: 112) では、語末音節が挿入母音である場合、音節そのものが認識されない可能性が高く、このために下げ核を担う拍を含む音節の位置が左にずれることが指摘されている。(26b) の中の例外にあたる13例のうち、(27) の条件を満たすものは9例、満たさないものは4例であり、(27) の条件を追加することで、例外にあたる語例は全42例中4例 (9.5%) まで減少した。

(28)(26b) の例外のうち、(27) の条件を満たすもの

[ペ]ンダント、[モ]ーニング、パ[フォ]ーマンス

cf. (27) の例外になるもの: [ア]ンケート、[コ]ンサート、[メ]ッセージ

次に、(26e)-軽軽軽の音節構造をもつものの例外となる語例について、(29) で考察する。(26e) の例外となる例は49例存在し、うち α ①型が8例、 α -②型が1例、 α -④型が19例、 α -⑤型が19例、 β -②型が1例、 β -③型が1例であった。

(29)(26e)-軽軽軽の構造をもつ語の例外について

a. (23) の無核化規則のうち、(23c) の「語末母音が/u/以外である」の条件のみをみたまらずに α ①型で出たもの (7例)

b. α -④型および α -⑤型で出た語のうち、語末音節か後ろから3音節目の母音が/i/か/u/であるもの (32例・田中 1995: 66-67)

(30)(26e) の例外のうち、(29) の条件を満たすもの

(29a) を満たすもの: アドリ[ブ、アルバ[ム、ホノル[ル

cf. (29a) を満たさずに α ①型で出たもの: ハーモニ[カ

(29b) を満たすもの: [カ]プセル、オ[リ]ジナル、ウ[エ]ートレス

cf. (29b) を満たさずに α -④型および α -⑤型で出たもの: [イ]ンパクト、[コ]ンテスト、[パ]ーフェクト

(29a) については、(23) の例外となるものであるが、拍数および音節構造により無核型で出たものと解釈される。(29b) は、田中 (1995) で述べられている外来語やカタカナ無意味語に関するアクセント規則であり、 α -④型および α -⑤型で出た全38例中、32例が (29b) の規則で解釈できるものであった。(29b) を満たさずに α -④型および α -⑤型で出たものが6例出現したが、いずれも語末が挿入母音の/o/であるものであり、(27a) のケースと同様に、核付与における挿入母音の相対的弱さによって下げ核を担う音節が左に移動したと解釈されうるものであった。

(29) の規則を追加することで、例外にあたる語例は139例中10例 (7.2%) まで減少した。

(26g) (-) 軽軽重、(26h) (-) 重軽重の音節構造をもつ語における例外については、(31) に示す外来語アクセントの-③型規則を追加することで、例外となる語のうちの多数を解釈することができる。

(31) 語末から数えて3拍目が自立拍ならばその拍が下げ核を担い、特殊モーラならば先行する自立拍が下げ核を担う (上野 2003: 74)。

(32) (26g) (-) 軽軽重の音節構造をもつ語のうち、(22) の予測する型で出たものと (31) の予測する型で出たもの

(22) の予測する α -④型: [カ]ロリー、ア[レ]ルギー、コ[メ]ディアン

(31) の予測する α -③型: ガ[ソ]リン、バル[コ]ニー、アドレ[ナ]リン

(33) (26h) (-) 重軽重の音節構造をもつ語のうち、(22) の予測する型で出たものと (31) の予測する型で出たもの

(22) の予測する α -⑤型: [ア]イボリー、[タ]ンバリン、ブ[ロ]ッコリー

(31) の予測する α -③型: イン[シュ]リン、バー[ベ]キュー、アコー[ディ]オン

(22) のアクセント規則と、(31) の-③型規則では、(26g) (-) 軽軽重、(26h) (-) 重軽重の拍構造をもつ場合のみ、予測する型が異なる。

(34) (22) と (31) の予測の差異

音節構造	(22)	(31)	
(26a) (-) 軽重軽	α -③型	α -③型	同一
(26b) (-) 重重軽	α -③型	α -③型	同一
(26c) (-) 軽重重	α -④型	α -④型	同一
(26d) 重重重	α -④型	α -④型	同一
(26e) 軽軽軽	α -③型	α -③型	同一

(26f) (-) 重軽軽	α -④型	α -④型	同一
(26g) (-) 軽軽重	α -④型	α -③型	異なる
(26h) (-) 重軽重	α -⑤型	α -③型	異なる
(26i) 4拍重重	α -④型	α -④型	同一

(31) の予測する α -③型で出たものは、(26g) (-) 軽軽重の音節構造をもつものは26例、(26h) (-) 重軽重の音節構造をもつものは11例であった。(31) の規則を追加することで、(26g) (-) 軽軽重の音節構造をもつものの例外は全95例中15例 (15.8%)、(26h) (-) 重軽重の音節構造をもつものの例外は45例中3例 (6.7%) まで減少した。

(22) で予測する型 α -④型および α -⑤型で出たものと、(31) で予測する α -③型で出たものについて、(35) に示す通り、語末から数えて3拍目が挿入母音である割合に差がみられた。語末から数えて3拍目の自立性によって、どちらの規則が適用されるかの傾向があると言える。

(35) 語末から数えて3拍目が挿入母音であった割合

	(22) の予測する型で出たもの		(31) の予測する型で出たもの	
(26g) (-) 軽軽重	30例/53例	(56.6%)	5例/26例	(19.2%)
(26h) (-) 重軽重	10例/31例	(32.3%)	1例/11例	(9.1%)

以上、(26) において、(22) ~ (24) で予測できない型で出た語が20%を超えた拍構造をもつものについては、それぞれの拍構造ごとに規則を追加することで、いずれも予測できない型の割合を20%未満に減らすことが可能となった。すべての拍構造について、80%以上の割合で外来語のアクセント型が予測可能であるという結果となった。

5. まとめ

本論では尾鷲方言の外来語について扱い、外来語の式は基本的に α 式に決まり、どの拍がアクセント核を担うかは拍構造と連関をみせることを示した。尾鷲方言は第2節で述べた通り3種の式の対立をもつアクセント体系であるが、外来語アクセントのふるまいから、無標の式は α 式であることが強く示唆される。田中 (2017) では、式の対立をもつ大阪方言において、[ダイヤモンド とコンク[リ]ート のように、式の対立がみられる外来語の例が指摘されているが、尾鷲方言においては、そのような外来語アクセントにおける式の対立は基本的に観察されなかった。

また、尾鷲方言の外来語アクセントにおける下げ核の位置の決定には、東京方言と同様の各種規則が働くこと、音節が大きな役割を果たすことを指摘した。

尾鷲方言は (36) に示す通り、特殊モーラが下げ核を担うことのできる方言であり、和語の名詞においてオ[ン]ナ と[カ]ンナ のような対立の例もみられる。しかしながら、外来語にお

いては特殊モーラが下げ核を基本的に担わず、特殊モーラの自立性が低いととらえられる。語種によって特殊モーラのふるまいが大きく変わると言える。

(36) 特殊モーラが下げ核を担う例

湖西市	コサ[イ]シ	cf.	ミ[サ]イル
通り	ト[ー]リ		[ゴ]ール
女	オ[ン]ナ		[イ]ンド

本論で述べた各種規則によって、外来語アクセントの8割以上が予測できることを述べた。しかしながら、残る2割弱の例外となるアクセント型で出た語例が課題として残る。特に、4例のみ得られたβ式で出た語、1例のみのγ型で出た語に関して、なぜその式で出るに至ったかについて、今後詰めるべき課題としたい。

参考文献

- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (2)」 『日本学士院紀要』 42-1: 15-70.
- 上野善道 (1992) 「昇り核について」 『音声学会会報』 199: 1-14.
- 上野善道 (2003) 「アクセントの体系と仕組み」 『朝倉日本語講座3 音声・音韻』 朝倉書店: 61-84.
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」 『言語研究』 130: 1-42.
- 儀利古幹雄 (2010) 「日本語の外来語における擬似複合構造 -語末が/-Cingu/である外来語のアクセント分析-」 『神戸言語学論叢』 7: 1-18.
- 儀利古幹雄 (2011) 「日本語における擬似複合構造と平板型アクセント -語末が/-CiN/である語のアクセント分析-」 『音韻研究』 14: 73-84
- 金田一春彦 (1959) 「熊野灘沿岸諸方言のアクセント」⁷ 『名古屋大学文学部十周年記念論集』.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』 塙書房.
- 金田一春彦 (1975) 『日本の方言-アクセントの変遷とその実相』 教育出版株式会社.
- Kubozono, Haruo (1996) Syllable and accent: Evidence from loanword accentuations. *The Bulletin* (Journal of Phonetic Society of Japan) 211: 71-82
- 窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』 岩波書店.
- Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from? A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116: 1140-1170.
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』 東京堂出版.

⁷ 金田一 (1975) に「熊野灘沿岸諸方言のアクセント 1. 北牟婁郡の部」のタイトルで再録。本論では金田一(1975 [1959]) として引用する。

- 田中真一 (1995) 「音節構造から見たカタカナ無意味語と外来語のアクセント」 『日本語・日本文化研究』 5: 59-68.
- 田中真一 (2008) 『日本語におけるリズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』 くろしお出版.
- 田中真一 (2017) 「「ダイヤモンド」と「コンクリート」のアクセント -大阪方言における外来語の音調変化と言語構造-」 西原哲雄・田中真一・早瀬尚子・小野隆啓 (編) 『開拓社叢書 29 現代言語理論の最前線』 開拓社: 128-146.
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』 勉誠出版.
- 平田秀 (2013) 「三重県尾鷲市方言の複合名詞アクセントについて」 『東京大学言語学論集』 34: 43-63.
- 松浦年男 (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』 ひつじ書房.

The Accents of Loanwords in the Owase Dialect (Mie Prefecture)

HIRATA Shu

hiratashu1925@gmail.com

Keywords: Japanese Accent, Accents of loanwords, Syllables and morae

Abstract

In this article, we discuss the accents of loanwords in the Owase dialect based on findings from our fieldwork. The Owase dialect has a three-register accent system with one lexical accent kernel per word. Most loanwords have an unmarked accent pattern as follows: if the penultimate syllable of the loanword is heavy, the independent mora of the penultimate syllable bears the accent kernel. If the penultimate syllable is light, the independent mora of the antepenultimate syllable bears the accent kernel. In the Owase dialect, almost all loanwords (672 out of 677 words) have Register α , and we can judge that the unmarked register in the Owase dialect is Register α . The mora that bears the accent kernel is predictable on the whole from the syllable structure.

(ひらた・しゅう 国立国語研究所)